

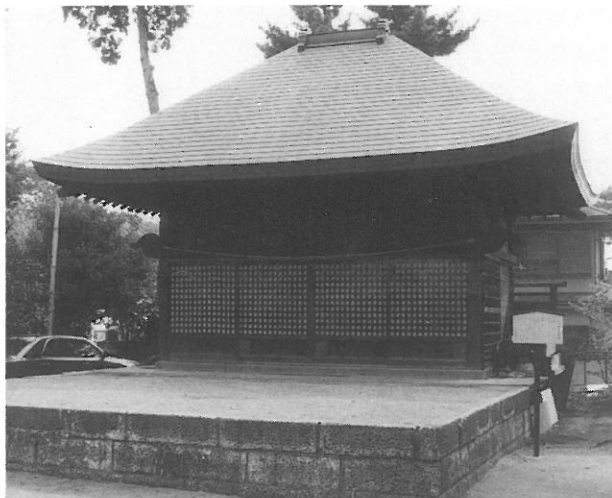
平成10年度中野区指定文化財

平成10年度中野区文化財は、建造物・考古遺物を中心に、つぎの7件を指定しました。

神楽殿（江古田氷川神社）

江古田3-13-6

弘化4年（1847）に建立され、屋根の勾配や全体のバランスは美しく、区内に残されている数少ない江戸時代の建造物です。桁行3間（5.5m）、梁間2間（3.6m）、屋根は寄棟造りで、正面は四枚立ての引違い戸が入っていますが、創建時は摺り上げ戸でした。内部は板張り床で、格子天井です。この格子天井には色彩豊かな花鳥画が描かれています。絵師が山崎家の茶室・書院に逗留して、ここから通って花鳥画を仕上げたということです。江古田獅子舞はこの神楽殿の前で奉納され、建造物としてばかりでなく、郷土の民俗芸能と一体となった景観を保持している点でも、価値の高いものです。

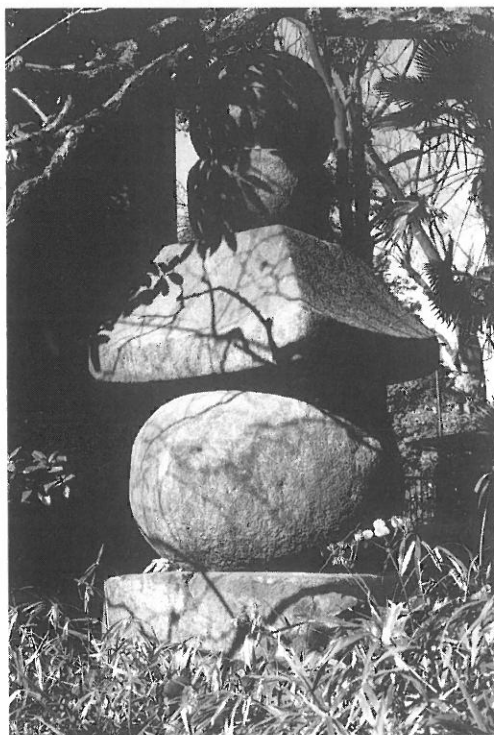


五輪塔（宝仙寺）

中央2-33-3

五輪塔の五輪とは、仏教でいわれている空・風・火・水・地といった宇宙を形成する五つの元素を示すものです。

宝仙寺の五輪塔は、高さ2.71mで、鎌倉や箱根の類例を除くと関東でも最大級に属す、大変珍しいものです。一番上の空・風輪は一石からなり、その下の火・水・地輪は各々独立して彫成されています。軒はやや内側に倒斜していて、薄目で関東地方に多く見られるものです。全体のバランスから見て、様式的には鎌倉時代後期から室町時代初期のものと推定されます。規模の点では資料の少ない中世の中野を解明する上でも重要なものです。



縄文土器（勝坂式・加曾利E式）5点

資料館収蔵品

練馬区豊玉北二丁目中新井弁天遺跡で出土した資料で、江原に在住していたアマチュア考古学者・郷土史家でもある故堀野良之助氏の収集資料で、氏は武蔵野台地を中心とした膨大な考古資料を収集しました。これら5点の土器は、縄文土器の編年を確立した、故山内清男博士によって縄文時代中期の勝坂式・加曾利E式土器の標識の一つとされたものです。右上の土器は、全体に縄文を施文した後に器の上半分に、太い沈線で幾何学的な文様を施す勝坂式の典型的な深鉢（主に煮るための形）です。その下の二つの土器は、縦方向の櫛目をまんべんなく施した後に、細い沈線で横線と連続する弧を描くいわゆる連弧文土器と呼ばれる加曾利E式の深鉢です。

下の土器は、縦方向の櫛目文だけを施した加曾利E式の深鉢です。その下の土器は、加曾利E式の浅鉢（盛る器）であり文様を施さないシンプルなデザインが特徴です。

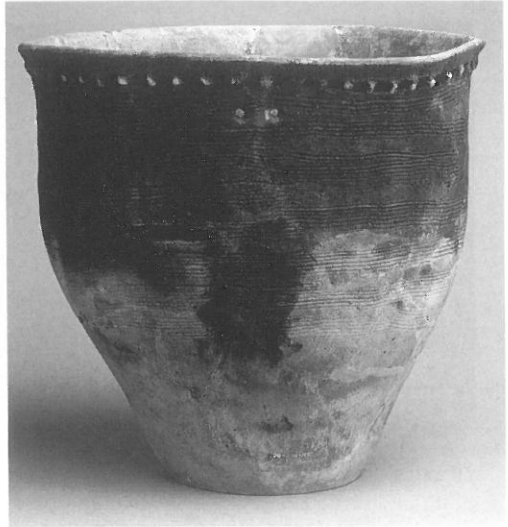


縄文土器（興津式）

資料館収蔵品

江原二丁目寺山窪泥炭遺跡で出土した資料です。

縄文時代前期末に利根川流域に分布した興津式と呼ばれる土器です。櫛状の工具で横方向の文様を施すのがこの型式の大きな特徴です。茨城県の土器が東京都である中野区で発見されたことは大変珍しいことで、今から約5000年前の地域間の交流の広さを示す重要な資料です。



弥生土器（高坏）^{たかつき}

資料館収蔵品

練馬区春日町遺跡で出土した資料で、故堀野良之助氏が所蔵していたものです。

関東地方における弥生時代後期の典型的な高坏（盛る器）です。脚部は欠損していますが、複合口縁の縄文も丹念に施文されており、坏部分の外側と内側には磨きがていねいに施されています。全体のバランスもよく、優れた製品です。

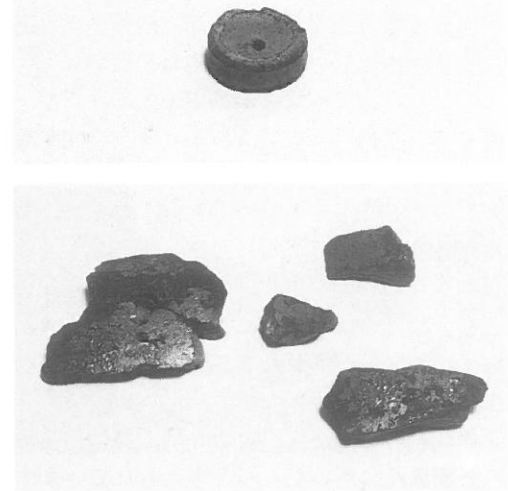
また、弥生時代研究の確立者である故杉原莊介博士によって、久ヶ原式の高坏の標識とされた土器です。



縄文時代の漆塗り木製品

資料館収蔵品

江古田三丁目の北江古田遺跡で出土した、縄文時代後期（約3,500年前）の漆塗りの木製品で、耳飾り1点と椀の破片が発見されています。これらの製品は科学的観察によって5回の漆の重ね塗りが施されていたことが明らかにされています。現代と同等の高度な工芸技術が駆使されている点は、縄文時代の文化を考える上で貴重な資料といえます。





北江古田遺跡土坑一括資料

資料館収蔵品

北江古田遺跡31号土坑の中からまとめて出土した資料です。深鉢1点、浅鉢2点がありますが、上の浅鉢は、全体に赤漆が塗られており、口縁部に植物繊維で編まれたタガがめぐらされています。このような例は大変珍しく、漆という当時の最高技術が用いられていることと、タガをしめるということから日常以外の特別な用いられ方をしていることが予測されています。その下の浅鉢は口縁部の下部分に、やはり赤漆によってジグザグ（鋸齒文）の文様が描かれており、これも特殊な用途が考えられるものです。

これらのことから、この一括土器は、当時の祭祀儀礼に用いたものと考えられています。

